



もとあき  
篠原資明 教授

人間・環境学研究科  
芸術学基礎論

## 篠原教授 × 『饗宴』

プラトンの『饗宴』は、美と愛の話です。現在の哲学は真理を追究することに重きが置かれています。しかし、プラトンは真理より美を重視していました。一般には彼は「真善美」を提唱したと言われていますが、実は「善美」としか言っていません。この本を読むと、その「善美」が非常によくわかります。

私はこの本を読んで、哲学ひいては学問をする時に、その美しさを好きになり、そこから深い知識へと到達するというのが基本だと思ったんですね。また、哲学というものは非常に屈託がない場所で交わされるものだな、と思ったんです。哲学といつかしこまったイメージがありますが、『饗宴』では宴会場で哲学が語られます。そこが好きですね。この本も

真面目に読むのではなくて自由に連想を働かせて読んでほしい。

京都大学は「京都学派」のように、哲学が1つの柱になってる場所ですよ。そういう大学でデカルトやハイデガーなどから哲学に入って真理に傾いてしまうより、まずプラトンから入ることをおすすめします。学生時代に何か一冊でもいいからゆったりと本を読む経験をしておくと、今後の人生がより豊かなものになると思いますよ。



『饗宴』  
プラトン著  
久保勉訳  
岩波文庫

教授に聞いた！

# 京大生にすすめたい一冊



まさあき  
馬場正昭 准教授

理学研究科  
文系向の基礎化学

## 馬場准教授 × 『こころの処方箋』

私がおすすめるのは河合隼雄先生の『こころの処方箋』という本です。河合先生は京都大学の理学部を卒業され、高校の数学教師を勤めてから臨床心理学の道に進まれました。そして悩みを持つ若者や子どもたちにカウンセリングをしていらっやいました。この本はその時の経験をまとめたエッセイで、何かにつまづいたときにどうやって立ち直ればよいかとか、どのように生きるべきかということが書かれています。

今、日本は大変な状態にあります。これから社会に出る学生さんにはぜひ日本を作り変えていってほしい。そのときには「心技体」を一体にするということが大切です。しかし最近では技だけで結果を出すことだけに熱意を燃やしている学

生が多いんじゃないかと危惧しています。この本には「こころとからだ」に関連して、「何のために技を磨くか」ということが書かれています。そこが重要です。悩みがある人はもちろん、悩みがない人も一度読んでみてください。特に大学生の場合は、これから社会に出ていった時のいい指針になります。しかし、この本は読んですぐわかる本ではありません。だからぜひ手元において、何回も読んでみてほしいと思います。



『こころの処方箋』  
河合隼雄著  
新潮文庫

はみだし  
すてーじ

クリスマスとかけまして……？  
⇒1人ぼっちの僕と解きます……。

(文・2 yohey!)  
(その心は……；編)

## 柴田教授 × 『竜の卵』

ロバートL.フォワードの『竜の卵』はハードSFというジャンルで、SFの中でも特に科学性の強いものです。現代天文学の最先端の知識を取り入れながら、科学の入門書としても読みやすく書かれている小説です。

『竜の卵』は中性子星という、太陽と同じ質量でとても小さい星の表面にプラズマ状の知的生物がいる、という話です。その生物を見つけた地球人が交信を行い、ニュートン力学や量子力学を教えているうちに、生物の知的レベルが地球人を越えてしまいます。そして独自の文化を築くのですが、その生物はプラズマでできているので、少し特殊です。プラズマは磁力線に平行に動くのは簡単ですが、垂直には動きにくいものなのです。その星

の磁力線は南北の方向を向いているので、その星では交通網が南北にしか発達しないんですね。面白いと思いませんか？私が読んだのは30年ほど前なのですが、この本の話は忘れられません。

科学的考察がとてもしっかりしているので、物理や宇宙に興味がある人は絶対に面白く読めると思います。小説なので文系の人も読みやすいと思います。科学になじみがない人にもぜひ読んでもらって、感想を聞かせてほしいですね。



『竜の卵』

ロバートL.フォワード著  
山高昭訳  
ハヤカワ文庫SF



かずなり  
柴田一成 教授

理学研究科  
宇宙総合学

寒い冬。お鍋で温まるのもいいですが、「読書の冬」もいいですよ。今回は全学共通科目の人気教授に「京大生にすすめたい一冊」を紹介していただきました。ぜひ本選びの参考にしてみてください。

## 戸田准教授 × 『自由論』

僕はJ.S.ミルの『自由論』を推します。この本では政治的自由がなぜ重要かという話をしています。民主主義は一見すると公平ですが、実際は多数者が少数者を抑圧することがある。自由を抑圧する人は自分たちこそ正しいと思っていますが、多数者であっても間違っている可能性がある。だから、言論や表現の自由を最大限認めたり、少数者の意見を残したりしておかなくてははいけない。

今はネットが普及し、個人の意見が出やすい時代です。でもよく見ていると、ブログの炎上なども多く、あまり健全な状態ではないと思います。自分が間違っている可能性を考慮せず、多数側にいるというだけで一方的に少数派を批判する。また、そういった批判を恐れて周囲と違

う意見を言いつらい風潮もありますよね。自由に発信できそうで、実は見えない形で自由が制限されていることがある。だから、自分が相手の立場になって配慮するということが大切になります。正しさというのは、「正しいから正しい」のではなく、「議論で戦わせた結果、残ったものが正しい」んですね。だから波風を立てるようなことも恐れずに言えるような環境を作っていってほしい。そういうことを、この本で学んでほしいですね。



『自由論』

J. S. ミル著  
塩尻公明・木村健康訳  
岩波文庫



たけふみ  
戸田剛文 准教授

人間・環境学研究科  
哲学基礎論

はみだし  
すてーじ

自炊は楽しくて経済的。  
⇒ 2週間放置された牛乳、シンクに山積みになった食器、味付けがおかしい野菜炒め……。

(文・院 夏太郎)  
(こうして僕は自炊をやめた；編)